

# 南北と假名手本

文化文政期に歌舞伎作者として活躍し、その暮の十二年（一八二九年）七十五才で死んだ四世鶴屋南北の脚本に、あまねく人に知られ上演回数のもっとも多いとおもわれる「假名手本忠臣蔵」（一七四八年八月十四日竹本座初演）がいかにとりいれられているかを、台詞を中心にしてみてゆきたい。

## 1 第三段によるもの

文化七年八月市村座「当籠入婚祭」。茶屋場で、藤屋の若い者仙吉と米吉がニワカをしてふざけてみせるところ。南北らしいコツケイがのぞいている。

（米吉）判官どの、遅い〜。内にはかり粘り付いてござるによつて、御前の事はお構ひないちやまで。

（仙吉）ハム、ハム、これは〜師直どのには、御酒機嫌か、御酒参つたか。

（米吉）イヤ、いつ盛らしやつた。御酒下されても、勤めるところ

## 田井庄之助

はきつと勤めるこの師直。

ト此せりふにて兩人詰合ひありて

鮎やい、鮎待ひやい。

（仙吉）すりや師直、今の悪口、本性でお云やつたか。

（米吉）オム、本性、本所で云つたらどうする。

（仙吉）オム、本所ならば本所五ツ目。

（米吉）五百

（仙吉）やくわん。

ト薬籠を出す。チヨン〜と拍子木。

お茶上がらんかお茶。

（米吉）饅頭やおこし。

ト兩人駈けて下座へ入る。皆々誉める。（二幕目、吉原仲之町の間）

いうまでもなく、江戸本所五ツ目の五百ラカンをかけてある。佛師松雲の刻むところで、天恩山羅漢寺に移されたのは元禄八年のこと。文化九年正月市村座「色一座梅椿」。浅草柳橋の料理茶屋萬八の

場(序幕)で、浄瑠璃のさらい、会をしているところへ、遠山甚三郎が清流のまゝ殿様のこしらえで、振袖姿の萬入の娘お玉をつれて出てくる。

(たま) 申し殿さん、皆さんが呼び申してちやわいなア。

(皆々) サア、皆待つて居ります。

(はつ) 殿さん、お前もとつと、ソワ、としてばつかり、娘御さんちやの何のと、お楽しみでござんすなア。

(甚三) 楽しみでなうてか。今日は大事の其方の名弘め、しつぱりと一段語るつもりぢや。

(たま) 申し、其やうに酒を上りましたら、浄瑠璃が出来ますまいぞえ。

(甚三) なにサ、師直ではないが、酒はたべてもたべいでも、語るところはキツと語るぢや。大事ない、お玉、てまへと道行を掛合ひに語らうか。

右の二例はあきらかに忠臣藏三段目の口、鎌倉御所での刃傷の場をふんで台詞にしている。いまは原文をあげるにもおよぶまい。また、つぎの例は、はっきりそれときめかねるものもあるけれど、一応こゝに置いておいていゝとおもわれる。

文政五年五月河原崎座「盤験魚山録」。石井兵助が兄右内の敵である藤田水右エ門に逢い、若党金六にすすめられて立合うところ。

(兵助) 是非に及ばぬ。この場に於て

(水右) そんならおれと立合ふか。

(兵助) いかにも。

(水右) ア、本性でか。

(兵助) 云ふにや及ぶ。(序幕・石和川敵討の場)

文政八年正月中村座「御国川曾我中村」。

(善六) ナニお前、アノ勤めをしたいといふのか。……いよくさうなら、コレ、爰に金もあるが

(善右) そんなら十六夜どのを破談にして、この女中を抱へるのか。

(善六) 御亭主へは氣の毒だが、これも商売、無疵の玉へころぶのサ。

(善右) ハテ、相手變つて鬨治どのだなア。(四立目・佐介ヶ谷の場)

三日月お小夜がわざと薪をぶつけて団三郎の女房十六夜の顔にキズをつけ、百両で売られてゆく場面。こゝの二人は質入れの金をせがみにきた今市屋の善右エ門と、判人さぼてん善六。忠臣藏で高師直がはじめは桃井若狭之助を悪罵したため、若狭之助が師直を討果せうとする決心を知った家老の加古川本藏が、主人には知らせずこっそり師直にワイロをおくる。そのききめはテキメンで急に風向きが変り、若狭之助にはツイシヨウをいい、判官の妻顔世御前へのレンボのかなわぬ腹イセも手伝つて、鬨治判官に毒づきはじめる。それとつて台詞にした例である。

## 2 第四段によるもの

文政四年九月河原崎座「菊宴月白浪」。

(定九郎) すりや、親人の見らるゝ前にて

(りん) 夫婦の杯いたさずとは、エム、有り難うござりまする。

(九郎兵) それにつけても御検使の手前……ハツ、お聞きの通りこの所にて、未来の土産、夫婦の杯、何卒御両所のお情にて、杯の間暫時御容赦。

(島五郎) こりやよからう。杯事とは羨ましい。酒よからう、この山名……サ、今は高野の島五郎、お合ひ致さうと云ひたいが、そりやアならぬ。上を恐れぬ何のたは言。

(六大夫) 祝言などとは以ての外。ならぬぞ。 (二段目・斧聞居の段)

原曲の四段目、扇ヶ谷上屋敷の場で判官の切腹するところでの上使のいう、ヤマそれようござる。薬師寺もお相致さうをふんで見る。この薬師寺が山名々にかわっていることについての卑見はずでのべているので、こゝにはくりかえさない。(註一)ただ、この作品の大きい特色は、こゝの斧九郎兵エと定九郎の父子を忠臣に仕立てていることで、いかにも南北らしい史実の無関心がみられる。が、それももつともな話ともいえるのは、これがもともと忠臣蔵の後日譚として筆をとられた通し狂言だからである。全段を十一に分けているのも原作にしたがったものだし、いたるところに原作を当てこんだりにおわせたりしてある。それに、すっかり書替えとして書かれているので、こゝの上使も高野島五郎師泰と種ヶ島六太夫としてあり、ほかにも桃の井の與女中加古川・古骨買ひと五郎・小山田源吾・近藤源四郎・山名次郎左エ門・百姓与一兵エ・太田了竹・おかる、それに一力升屋勘九郎・垣坂三平などの人物が登場する。

### 3 第五段によるもの

文化七年三月市村座「勝相撲浮名花觸」。

「コリヤ、富八、近所の芸者を残らず呼びに遣れ。コレ、与一兵衛では無いが、懐には五十両、今宵はばつくと遣ふ。お俊、わが身も御用をおしまひなされたら、ちとお出で。この五十両を、アム、遣ひたい」 (序幕・大のしの場)

盗んだ金をふところにした潮田伴之進が、芸者お俊と白藤源太のまえでみせびらかすところ。もちろん、忠臣蔵で、勘平のために身を死たお輕の身代金のうちの半分をもつて家路をたどる与市兵エの筋をふんでいる。

文化五年七月市村座「時栴檀出世請状」。

(小藤) ほんに戦場といへば、あの助作どのを見やしやんせぬかえ。

(たぬ) イヤ、見やしなんだが(ト思ひ入れあつて)アム、見たく。

(千里) コレ、どこで見さんしたえ。

(たぬ) あ、たしか山崎の渡し手前に、年頃といひ、なんでも栄三郎によく似た男が、流れ矢か鉄砲なんでも飛び道具にあつて、五段目の定九郎といふ仕打でゐたが、たしかあの手負ひは助作であつたわえ。

(小藤) エム。

(千里) コレ、たぬ藏さん、そりやマア、ほんまの事かいな。

勘平のうつた二つ玉が定九郎にあたる鉄砲渡しの筋をとつてある。

それも念がいつて、原作の山崎街道の地名まで都合よくとりいれることができた。つぎの例も、この例とおなじ思いつきからでている。

文政十年六月河原崎座「獨道中五十三駅」。

「どうともしろと吐かしたから、どうともしたのだ。コレエム、

おれも以前は武士の飯を食つた与作だ。今でこそ狩人よ。鉄砲も御免で渡つてゐるぞ。それに又、ふざけた事を吐かすと、コリヤこの鉄砲で定九郎もどきだぞ。サア、待ちますといふ一札を書け。

「書かねえとこれだぞ。」(三幕目・小夜の中山無間の鐘の場) とういつて、うしろの鉄砲をとつて火繩をつけ相手の二人に筒先をむける。そのまえにはタバコ盆で島田の萬九郎の頭を打ちわつての合詞である。その萬九郎と赤羽屋五郎作に、雷丸の短刀をよそへ売るのを待てといつてキエンをあげる伊達の与作の右の合詞は、クセのわるい酒のせいである。いや、ほんとはそうみせかけていつてゐるまでで、禁酒をちかつた早々、女房の小萬にたのまれて飯んだ酒が、実は酒クセを心配して母親がとりかえておいた水とわかり、わざと酔つたふりでのタンカである。そこにおかしみもまれる。だから、このあとではこんなこともいう。

「……わしが云ふ事に無理はあるまい。そが生酔ひ本性たがはず。」

これも七段目一方の場からとつたとみられないこともない。由良之助の遊興ぶりを本心からではないかと察じた矢間・竹森・千崎の三人が、イヤ酒の酔本性違はず。性根がつかずば三人が。酒の酔を覚さしませうかな。といきこむところがあるから。

#### 4 第六段によるもの

文政六年正月市村座「八重霞皆我組絲」。

(はね吉) 思ふ男のその為と、お軽もどきは人聞きが、よけれどわ

ツちヤア好きな道。

(権兵エ) 義理ある男へ

(綱五郎) 立てさす忠義か。

(佐五郎) 天暗れ感心。(第二番目中幕・浅草三間町の場)

おもう男のために身を売る芸者はね吉と権兵エとの、ほろりとして別れをおしむ舞台がこれにつづく。いうまでもなく、夫勘平のため一文字屋に買われてゆくお軽を当てるの合詞である。

全年三月市村座「浮世柄比翼稲妻」。

(くに) 初めてお目にかゝりましたあなた様へ、お願ひと申しまするその訳は、どうぞ奉公人をお抱へなされて下さりませ。

(善六) そりやハヤ、江戸近在を股に掛け、と斯う云へば、どうやら一文字屋の合詞のやうだが、奉公人の取引きは、商売づくの事だから、世話もしませうが、何しろ、その玉を見ないうちは、値も附けられぬ。して、その奉公人は。

(くに) ハイ、私しでござります。

(一同) イヤア。(二幕目・大師河原の場)

へびつかいのおくにが判人善六にむかつていうことば。よっている原曲には、イヤこれ京大阪を股にかけ。女護島程奉公人を抱へる一文字屋。とある。

ところで、文化八年七月市村座の「謎帯一寸徳兵衛」にある、

(徳兵エ) サア、団七。この場の怪しみ、即ち我が子が訴人も同

然。

(た つ) 兵太夫様、お堀様も

(徳兵エ) 其方が非道の手に掛けたであらうが。

(団 七) サア、それは

(徳兵エ) サア〜、何と。

(団 七) それが知れたら、六段目だ。(大切・深川中裏の場)

といざま切りかける。この、六段目々ははつきりしない。忠臣蔵では、義父の与市兵エをあやまつて鉄砲で殺したのは自分だと早ガテンした勘平が、申訳けに切腹するのが六段目だから、逆にそれと同じ運命にしてやろうとでもいうのであろうか。いわゆる浄瑠璃六段目の結末をいっているのかも知れないが。

### 5 第七段によるもの

文政六年七月市村座「轡難石尊驢」。

(その) なんだ、やかましい、よく寝たものを

(はま) これな、晝寝も大概にしな。お客さんがお出でだよ。爰へ

ちよつと来な。

(その) アイ、只今それへ、参上仕る……由良之助どの、お目覚まされませう。(第二番目序幕・深川富岡屋の場)

うたたねしていた芸者お園が、富岡屋の女房お浜におこされてムダをいとうところ。原曲では、由良之助殿。矢間十太郎でござる。竹森喜多八でござる。千崎弥五郎御意得に参った。お目覚まされませう。とある。

文化七年五月市村座「繪本合法衛」。

(ぬ ひ) 多九郎さん、今日もお前がござんすと聞いたゆゑ、早う帰らうと思うたけれど、道でお客の悪酒落れ、虫が好かん事ばかり。一つ飲まして下さんせ。

(多九郎) そんな時には、一杯気をつけると、面白くなるものだ。

(善 助) オ、それ〜。七段目ではないが、酒でも無理に参らずば(トついでやる。)

(ぬ ひ) ほんに、命も続かぬわいなア。(七幕目・安井橋屋の場) 質屋の手代善助と仲居のお縁の割り合詞は、原曲でさきの三人が由良之助の本心をうたがひ、すでにこうよとみえたとき、平右エ門がとどめていう、つくく思廻しますれば。主君にお別れなされてより、仇を報はんと種々の艱難。木にも芽にも心を置き。人の讒無念をば。ちつと休へてござるからは。酒でも無理に参らずば。是迄命も続きますまい。醒めての上の御分別をふまえている。

文化十一年八月市村座「梁纏竹春駒」。

「手を出して足を戴く蜻蛉、忠臣蔵時分には、祇園町の硯蓋が蜻蛉、今はおいらがやうなお供客へ蜻蛉の桜煮。錢出さず酒を戴く蜻蛉。ハムムム。」(大詰・祇園町扇屋の場)

幕があくと、平舞台の真中に銚子杯と蜻蛉の足をいれた鉢をなおして酒を飲んでいる入藏が、いい気持での独白。この気のきいた台詞も原曲にある。九太夫が由良之助の心底をさくろうと、判官の速夜に蜻蛉を簪にはさんでさし出すと、手を出して足を頂く蜻蛉。忝い々といただいて食おうとする。酔いっぶりの活写されている場面をそのままうけ、しかもちよつとひねって、錢出さず酒を戴く蜻蛉——などとシャレるところに、南北の川柳的発想がのぞいていてほえましい。

文化十年顔見世市村座「戻橋背御振」。

(て ふ) カウ、親方さん、幽霊は縁の下へ、入つたよ。

(鬼 七) ナニ、縁の下へ。そいつは九太夫の幽霊かも知れねえ。

(喜之助) 親方、無駄を言はずと、行燈を持ってござい。

(鬼 七) 合点だ。 (二番目序幕・羅生門河岸切見世の場)

いうまでもなく、カゴに乗ってかえるとみせかけて縁の下にかくれ、やがては由良之助の手紙を盗み見する九太夫に当っている。

さきの「染纏竹春駒」の同じ場の少しあとに、奥の座敷では、どごんと寝たふりをしている奴の小萬を丹波屋と作がゆり起すが、心に期するところがあるので知らぬふりをする。やがて、寝がえりをうった小萬のソクがまくれてしどけなくなるのをふと見たと作が「人を浮かすと云へば、どうやらおれも浮かれさうだ。」折からまた、奥でハヤシ。

「ちよつくらちよつと、これを斯うやって忠臣藏の七段目。」

思わずと作、

「アレ、舟玉さまが。」

小萬は思い入れして夢中でソクをおさえる。このくだりは、七段目で、二階からお軽に密書を読まれた由良之助がハツとして、女をハシゴからだきおろすときわざとふざけて、道理で舟玉様が見える。々々洞庭の秋の月様を拝み奉るぢや。などというのをとつてある。

まえの「石尊艦」のすぐあと、

(その) オヤ、兄さん武助さんかえ。どうしてマア、この江戸へ

(武助) てまへも無事で、マア、めでたい。

(その) オヤ、兄弟二人斯う逢つたところは、何の事はねえ、七段目の平右衛門に、わつちやアお軽の気取りサ、押しが強い。

(武助) イヤモウ、われがさういふば、さらな生れ。おれもお旦那の政右衛門さまに、身持ち情弱な武助めと、勘当されてお内へは叶はず、兎やかうする内今度の騒動、爰ぞお詫びの好い墓と、……一力茶屋でめぐり逢う平右衛門とお軽になぞらえてあるが、武助の合詞には、平右衛門が足輕の身分でありながら義士の列に加えても、らいたいと懇願することばのおいがただよっている気がする。

三段目のところであげた「八幡祭」に

(丹平) さやう、丹平どのは三十になるかならぬに、主人のお使ひ。ア、草臥れました。

(浄閑) 在様でござらう。辻駕籠にも乗られいで

(丹平) 定めて足が

(浄閑) あいたかつたでござらうに、なせ

(丹平) ツン。

(浄閑) 駕籠にでも乗らつしやらぬぞ。 (四幕目・鳥越山崎屋の場)

と思わず浄瑠璃で語るコッケイ。もちろんこれは、勘平の切腹を知つたお軽が悲嘆にくれて血の涙をしぼっていう、勿体ないが父様は非業の死でもお年の上。勘平殿は三十になるやならず死ぬるのはさぞ悲しかろう惜しかる。逢ひたかつたであらうのに。なせ逢はせては下さんせぬ。をもじつてつかつていのである。

文化十四年三月 河原崎座「桜姫東文章」。

(桜姫) マア、その酒ま一度。飲みねえな。

(権助) 飲みねえちやア、飲んでやらるゝ由良之助ちやアねえ、権助様だ。ハムムムム。面白い面白い。(六幕目・山の宿町の場)

清支桜姫の書替え狂言で奇抜な脚色をしているが、飲んでやらるゝ由良之助ちやアねえと云つたがどうした。おどけた口もきいて見にやア、商売がならねえワ。その度毎に切られやうものなら、人種は盡きるワ。ほんに天川屋ちやアねえが、馬士の胤は盡きるわな。エム、馬鹿な侍ひだわえ。(五建目・元興寺の場)

## 6 第十段によるもの

まへの「染纏」の場の少しあとに、与作と義兵エの遠引めいたところがあつて切るタンカ。

「おれも桑名ちやア、長持ちへこそ入らないが、山形屋の義兵衛は男だワ。知らない物は知らねえと、柳に上りやア付け上がり、その状から附け込んで、なんぞ外に。」  
と思いいれあつて、

「その手は滅多に桑名の義兵衛、マア、さう思つてくんなんし。」その名も似よりの天河屋の義平が大星に男とみこまれて堺から鎌倉へ廻漕の仕事を受け付けているが、同士の疑念をはらすために人も知る策をかまえたとき、長持のフタの上にと、かかと坐つて顔色も変えず、天河屋の義平は男でござるぞ。子にはだされ存ぜぬ事を。存じたと心得申さぬ。嘗て何にも存ぜぬ。……と云つたかの合詞をふんでいることはあきらかであるが、長持にかくれていたのは実は由良之助だった。あとほくだけ、其手は桑名の姪始の俗語をとりいれている。

文化六年六月森田座「阿国御前化粧鏡」。

「コレ、お侍様、馬追ひがどうしました。往来を当にして、駄賃を取るがおいらの商売。馬を貸さうと云つたがどうした。おどけた口もきいて見にやア、商売がならねえワ。その度毎に切られやうものなら、人種は盡きるワ。ほんに天川屋ちやアねえが、馬士の胤は盡きるわな。エム、馬鹿な侍ひだわえ。(五建目・元興寺の場)

馬子の駄荷藏が狩野元信と銀杏の前にむかつて遊ぶところ。十段目では、さきの舞合のすくあとに、タム面白い刻まれり。……それ不思議として御詮議あらば、日本に人種はあるまい。一寸試しも三寸繩も。商売故に取らるゝ命。惜しいとも思はぬサア殺せ。悴も目の前突け。……と義平の男達ぶりをえがいてある。

## 7 その他

文政八年九月中村座「盟三五大切」。

(三五) あの櫃子に、おつりきな物が貼つてあるね。

(小萬) どうやら普請の、ありや絵図面を

(弥助) 昨日今日まで高野へ出入りの、大工が住んだこの古家。

(三五) もしや屋敷の

ト思ひ入れ。弥助ズツと立つて、件の絵図面をめくり取つて

(弥助) イカサマ、こいつは座敷の

(三五) 工夫を附けた絵図面は……コレ、この床の間が即ち抜け道。縁側伝ひに行く時は

(小萬) 廊下の板敷、縁側は、皆揚げ板にて、下家へ通路の

(弥助) 俥を取れば床づくり。

(二五) 天井板も物置きの、二階へ抜ける建て方は

(小萬) 迂濶に歩めば、コレ、爰にしつらふ落し穴。危ない工夫を

(三五) よくも魂膽。ハテいゝ物が(大詰・愛染院門前の場)

この高野の屋敷の説明は、第九段で加古川本藏が苦しい息の下から、娘小浪を力弥にめあわす引出物といつて差出すのを、力弥取つて押戴き披き見ればコハいかに。目録ならぬ師直が屋敷の案内々に。支閥長屋侍部屋。水門物置柴部屋まで絵図に委しく書付けたり。とはあるが、右の台詞のようなくわしい記述はない。たゞ浄瑠璃「假名手本」にはなくとも、歌舞伎などでこんな詞章が加えられただらうことは十分考えられるが。

右の作の序幕にこんなところがある。

(三五) コレ、てめえ、本所の方から、足を近く来る侍ひがあるぢやアねえか。

(小萬) たしかありやア、高野とやらいふ屋敷の、金役とやらだとよ。吝な癖に、おれが旦那は、今ぢやア飛ぶ鳥も落ちると、何だか解らねえ味噲ばかり。

その伴右エ門は源五兵衛にあてこすつていろ

「この伴右衛門は高野の家来、金の事なら跡へは引かぬ。以前は大家の扶持人が存せぬが、当時は浪人、編笠に高砂やアの口では、なアに身共に齒が立つものか。」

三五郎と小萬は、鹽冶の浪人で父頼の主であった不破教右エ門に金をみつごうとさんざん苦勞するが、悲しいことにその顔を知らない

ので源五兵衛がその人の変名であることに気づかず、悲劇をくりかえすよう筋をたててある。たゞ、右の台詞の特色ともいふべきは、高野の権勢がよよく、それに仕えていけば金は思ふままというところである。こうした脚色はこの作品より四ヶ月まえに同じ中村座で上演された、かの「東海道四谷怪談」で、伊藤喜兵衛が

「たとへ恋ひ病であらうとも、氣にいつた男なら、金にあかしても聲に致し遣はず。ハテ、当時出頭師直様の御家来、伊藤喜兵衛が一人の孫……」

とか、

「イヤモ、それも全く御主人、師直公の御発明と申し、御威勢によつて我れに至るまで、斯く活計欽業に年月を送ると申すものぢや。見さつしやれ、我が君に敵対いたせば、鹽冶どの、やうに、家國をも失ひ、家中の者ども、散りんと罷りなるて。左様な狼狽へた主人へ、仕官いたすもこれ因縁。それを思へば冥加至極の身の上ではないか。(序幕・浅草観世音額堂の場)

といったり、二幕目の彼の家の場では伊右エ門等三人のまえで小判をあらつてみせたり、小粒の金を吸ひ物のかわりに出したりする。といつても、それも無理からぬことで、この「四谷怪談」は忠臣蔵の二番目として出され、前後二日にわけて上演、ワキ役にも佐藤与茂七・直助権兵衛・小汐田又之丞・近藤源四郎などの役名をつかっているくらいだからである。それにつけても、むしろふしぎなのは、それにもかかわらず原曲の詞章をとつて台詞にしているのがみあたらないことである。一番目とあまりにつきすぎるのをおそれて、むしろさけたのもあろうか。

「独道中五十三駅」はいりまでもなく弥次郎兵衛と北八の旅に出



てのコッケイが中心になっているが、その五幕目・沼津芝居の場ではシロウトたちの天狗ぶりがおもしろい。

(当庵) わしはこれでも女形が得手物サ。昨夜の忠臣蔵では当てました。

(牡丹) 何をなされました。

(当庵) お軽と猪と二役しました。

(築兵) お軽より猪の方が評判がよろござった。

(婿七) ほんに生きてゐるやうだと云いました。

(捨八) 猪が、牡丹に戯むれ、といふ所の踊りは見ものでござつた。

(西念) 猪が踊りを踊るのは初めて見た。馬鹿々々しい。

(当庵) でも、よい、の外郎売には増しだんべい。

(西念) 医者のお軽があるものか。

(当庵) 坊主の力弥もないものだ。

その医者当庵は、「手習鑑」で龍田姫の死骸で横になっているうちに寝てしまつてイビキをかき、とうとう

「勘平どのは三十に」

と寝言までいう始末。また、舞台でケンカもする。

(築兵) それはおれが云ふのだ。

(婿七) エ、怒どうしい。一人で云はずと、おれにも云はせるが、いゝわさ。

(築兵) 貴様は外の事を云はつしやい。

(婿七) そんなら昨夜の判官のせりふを云ふべい。

(捨八) おれも身一兵衛をもう一遍云はう。

これらは忠臣蔵がいかに親しまれ愛されていたかを示すものといつ

ていゝであらう。

わたくしはかつて河竹黙阿弥の脚本に假名手本がとりいれられているかについて調べたことがあるが、(註1と同じ)その黙阿弥と南北の脚色態度の異同についてのくわしい比較は、いまは紙幅がゆるさないのでいちじるしい二をあげるにとどめる。

黙阿弥に二例みられた大序によるものが南北になく、黙阿弥の脚本になかった十段目によるものが南北のそれには二例あり、九段目をおもわせるものも一例あること。おもうに、忠臣蔵の最大の山場は九段目および十段目といえるであらうが、黙阿弥があるいはわざとさけているかとおもわれるのに反して、南北はためらうことなくつかっている。なお、黙阿弥の大序によっている例は、大序のそもその語り出しの部分である。

黙阿弥の脚本には義士の物語を題材にしたものが九つあるが、書替えといえるものがなかった。ところが、南北には直接物語をテーマにしたものがみられないかわりに、「四谷怪談」のように後日譚にしたててみたり、書替えにしているものが多い。「菊宴月白浪」など書替えが全篇にわたっている例である。南北の作家としての特色の第一はやはりこの書替えがあげられるであらう。(註2)こゝに両者の共通的性格ともいえる点は、假名手本を台詞にとりいれても、そのほとんどがコッケイ化されシヤレのめざしていることであらう、その両者のもつにおいはちがっていても。

南北の脚本で最近発見されているものがあり、それらを見るチャ

ンスがえられればこの小論も書き加えられねばならないところが出てこよう。大久保忠国氏が「近世文芸」第二号および第八号で紹介されたものなどそれである。そのうちの一篇は未刊江戸文芸資料1・2で翻刻されたので目をおすことができたが、これには假名手本とのむすびつきはなかった。

註1・「黙阿弥と假名手本」(「国文学攷」第二十八号)

2・「鶴屋南北の技巧」(「広島大学文学部紀要」第十四号)

(広島大学助手)